

「▲から▼へ！」

講演	木 村 良 己〔きむら・よしみ〕
講師紹介	同志社中学校・高等学校キリスト教学科教諭

【0】はじめに

(1) 「▲から▼へ！」

京都市営地下鉄：北の終点「国際会館」駅出口直ぐの同志社中学校・高等学校で、「キリスト教学」という授業を担当している、**木村良己**です。

今日は、「Doshisha Spirit Week 2020 AUTUMN」の講演者として、「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」という聖書の言葉（マタイによる福音書7章13—14節）を心に刻みながら、「『▲＝逆さまの同志社マーク』から『▼＝同志社マーク』へ！」という講演題でお話ししたいと思います。

再確認ですが、▼は、我が同志社＝「志を同じくする者が集まって創る結社」である同志社の徽章です。

1893（明治26）年に、神学部教授であり詩人・古代オリエント学者であった湯浅半月が考案したのがこの同志社の徽章です。

一筆書きで書くことができる私たちの学校の徽章は、正三角形を三つ寄せた形です。「国土」を表わすアッシリア文字「ムツウ」をモチーフに図案化されました。

知育・徳育・体育の三位一体、全人教育という調和を目指す同志社の教育理念を表わすものと解釈されてきました。

正三角形が三つ、下の方に向かい、そして一つに繋がりが合っているのがこの同志社マークです。

本来、三角形（▲）は、底辺が広く、上へ！上へ！と頂点へと向かっています。

しかし、この同志社マークは、三角形（▼）が下へ！下へ！と向かっています。

三角形が上へ！上へ！と競い合うように向かっていく。そんな上昇志向渦巻く競争社会の中で、同志社の徽章は、正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がりが合っているのです。

そこで、「『▲＝逆さまの同志社マーク』から『▼＝同志社マーク』へ！」という講演題にしました。

(2) きょうそう・きょういく・きょうせい

▼＝下向き三角形の同志社マークを想い描きながら、「きょうそう・きょういく・きょうせい」について、考えてみたいと思います。

「きょうそう・きょういく・きょうせい」と、「ひらがな」にしたのには、意味があります。

なぜなら、「きょうそう」と言っても、「競い争う競争」もあれば、「共に創り出す共創」もあるからです。

「きょういく」と言っても、力づくで「脅して育てる脅育」もあれば、「協力し合って育つ協育」もあるからです。

「きょうせい」と言っても、無理矢理「強いる強制」もあれば、「共に生きる共生」もあるからです。

〔1〕きょうそう：競い争う「競争」から、共に創り出す「共創」へ！

〔2〕きょういく：脅して育てる「脅育」から、協力し合って育つ「協育」へ！

〔3〕きょうせい：強いる「強制」から、共に生きる「共生」へ！

この「Doshisha Spirit Week 2020 AUTUMN」を通して、何よりも、競い争う「競争」社会の現実の中で生きる私たち自身が、▼＝正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がりが合っている「同志社良心教育」という「協育」活動の中で学び合うことを通して、未来を生きるために成長し合い、共に生きていく「共生」を探る希望へと、辿り着けたらいいなあと、願っています。

【1】きょうそう

「競争」から「共創」へ！

(1) あいてのこぶし、ひらいてください！

まずは、「きょうそう：『競争』から『共創』へ！」から始めましょう。

唐突ですが、私が担当する「キリスト教学」という授業で取り上げる、ゲームから紹介しましょう。

「あいてのこぶし、ひらいてください！」というゲームをしたことがありますか？

まず、立ち上がって、二人一組になって、向かい合います。

（残念ながら、今年は三密・対面不可・ソーシャルディスタンスの観点から、まだ実施できないでいるんですけどね・・・。）

そして向かい合った二人が、お互いに手を握ってこぶしを作り、そのこぶしを相手の顔の前に差し出します。殴ってはいけません。

さて、ここで問題です。「あいてのこぶし、ひらいてください！」

だいたい1分位かけて、いろいろと工夫し合います。約1分ほど経ったところで、「開けられなかった人」には「どう試みたのか？」を聞きます。

逆に「開けられた人」にも「どうやって開くことができたのか？」を聞きます。

皆さんだったら、どうやって「あいてのこぶし、ひらく」のでしょうか？

高校生の定番は、ジャンケンです。

でも「じゃんけんぽん」と言いながら、お互いにずっと「グー」のままなのです。

力尽くの場合だってあります。「お前、先に開けろよ！」と脅す者。

或いは、空いている左手を使って、力尽くで無理矢理開けようとする者。

「一緒に開こう！」とか何とか言って、「いっせいのせ」と言いながら、自分だけは開かない者。「舐めようとしたり」相手の嫌がることをやって、開かせようとする者。いろいろです。

なぜか私たちは、相手に負けまい！相手を何とかしなければならぬ！と、勝手に思い込み、力づくで、或いは相手を騙してでもと、策略を練ったりします。

確かに、「あいてのこぶし、ひらいてください！」と、言いました。

でも、「自分のこぶしを開いてはいけない！」とは、一言も言っていないのです。

冷静になりましょう。握手をしたら、どうでしょう？

普通だったら、相手もこぶしを開いてくれるはずですよ。

私たちの身体の中には、知らず知らずのうちに「相手には勝ちたい」「自分のペースでやりたい」「自分ではなく、相手を何とかしたい」という意識が染み込んでいるのでしょう。

「あいてのこぶし、ひらいてください！」でも同様です。

それは、動物的本能なのでしょう？それとも教育を受ければ受けるほど、競争意識が芽生えて、こぶしを開くことができなくなってしまうのでしょうか？

なんと不思議な競争意識が染み込んだ「強さ」に群がり、生命を削り合う関係からまずは解放されて、「同志社良心教育」を通して「共に創り出して行く共創」「弱さを絆として生命を育み合う関係」に、辿り着いて行きたいものだと思います。

（２）日本近代教育史における三つの私学！

ところで、「日本近代教育史における三つの私学（私立学校）」をご存知でしょうか？ 皆さんが学んだ「高校日本史」の教科書にも掲載されていたはずです。

さて「日本の三大私学」、どこと、どこと、どこでしょうか？

「日本の三大私学はどこか？」と聞かれて、慶應の学生は、「慶應・早稲田・同志社」と即座に答えるそうです。

早稲田の学生は「早稲田・慶應・同志社」と早稲田を先にして答えるそうです。

では、同志社の学生は？と言えば、「慶應・早稲田」或いは「早稲田・慶應」と答えた後に「さて、もう一つはどこだろう？」と、考えるのだそうです。

本当に謙虚です！中には、偏差値からなのでしょうか、「早稲田・慶應・上智」と思い込んでいる同志社の学生もいるようです。

もう一度確認しておきます。同志社高等学校が今年度使っている実教出版の文部科学省検定済教科書「日本史Ｂ」によれば、「日本近代教育史における三つの私学」は、「福澤諭吉の慶應義塾、新島襄の同志社、大隈重信の東京専門学校＝早稲田」なんです。

「高校日本史」の教科書にも登場する三大私学、それぞれに持ち味がありました。

「財界の慶應」「政界の早稲田」「福祉の同志社」と、評されてきました。

すかさず、「福祉の同志社かよ、なんかいいいちだな！」と、口にする生徒もいます。

でも、同志社草創期のこだわりです。

日本で最初に社会福祉学科を設置し、宗教界や社会福祉の世界に関わる多くの著名な人物を輩出した、それが、私たちの同志社です。

講演題にした『▲▲＝逆さまの同志社マーク』から『▼▼＝同志社マーク』へ！。

「同志社とは『底辺』へと向かう志で結ばれた群像である」とかつて語られてきた言葉の意味合いを、「日本の近代教育史における三つの私学の草創期のこだわり」と共に、正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がり合っているこの同志社マークに見出すことができます。

キリスト教主義教育を土台にした同志社、「福祉の同志社」と評されてきた同志社の徽章は、上へ！上へ！と上昇志向渦巻く競争社会の中で、下へ！下へ！と向かう、他者の痛みに関心をもった感性をもって、痛みを共にして生きる＝そここそ「同志社良心教育」の神髄があると、私は確信しています。

同志社大学に付属する同志社小学校が開校される際に、校歌の作詞を依頼された詩人の谷川俊太郎さんが、新島襄と同志社について研究され、その歴史と校風から校歌の最後にこう表現されました。

「えらい人になるよりも、良い人間になりたいな 同志社小のわたしたち」（谷川俊太郎作詞 大中恩作曲 同志社小学校校歌）。

校風を見事に表現して、歌詞にしたためてくれています。

（３）「磨く前のダイヤモンドのようであれ」

新島襄は、「磨く前のダイヤモンドのようであれ。内に輝くものがあるならば、荒削りの見かけを決して気にしてはいけない。」と「わが校の〔教育〕方針」（１８８５年２月１３日）で語っています（学校法人同志社「現代語で読む新島襄」編集委員会「現代語で読む新島襄」丸善株式会社 ２０００年 １７８頁）。

ダイヤモンドは磨いてこそものだと思います。

しかし、「磨く前のダイヤモンドのようであれ。内に輝くものがあるならば・・・」

人との競い合いに勝利する競争・比較ではなくて、与えられている賜物＝「ありのままの自分」を輝かせ、その人らしく生きることを促した深い言葉です。

上へ！上へ！と競い合う「競争」ではなくて、下へ！下へ！と「底辺へと向かう志」を携えて共に創り出していく「共創」に参与できる空間、「磨く前のダイヤモンドのようであれ」というこの言葉を大切に、正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がり合っているこのマークを掲げる「同志社良心教育」の空気の中で、皆さんは大学生活を送っているのです。

【２】きょういく

「育育」から「協育」へ！

（１）ドラえもん５０周年

「きょういく：『育育』から『協育』へ！」に移りましょう。

２０２０年、それは輝かしい一年になるはず、でした。

「東京オリンピック・パラリンピック２０２０」「木村良己、最終年度授業」・・・

でも「思い通りにはならないもの」ですね。

実は２０１９年１２月２４日の朝日新聞朝刊に、こんな一面広告が出されました。

『「ドラえもん５０周年」今から５０年前、小学４年生など６つの雑誌にドラえもんが登場しました。連載開始の雑誌が１９７０年１月号なので、２０２０年はドラえもん５０周年、特別な１年になりそうです』という、期待と希望に溢れた感じの新聞広告でした。今年は「ドラえもん５０周年」だったのです。

でも「思い通りにはならないもの」です。

違った意味で「特別な１年」になってしまいました。

２０２０年４月２９日、新型コロナウイルス感染拡大の最中、朝日新聞朝刊に今度は、こんな一面広告が出されました。

マスクをしたドラえもんを背景に、「きみがうちにくれてから・・・」から始まるメッセージが綴られていました。

ネット上で反響を呼びました。「あれっ？ 耳をかじられて無くなっているはずなのにどうやってマスク付けてるの？」ですって。

「そっかよ！」という気もしたのですが、（ああ、そうだった。もともとドラえもんには耳があって、黄色いボディでした。気持ちよく昼寝をしていたドラえもんが、ある日ネズミに耳をかじられてしまい、耳のない姿を鏡で見て、相当なショック！驚いて、ビクビクして、青ざめて、青色のボディになってしまったのだ！ということ、思い出しました！）。

でもいいですねえ！２２世紀から来た、未来を知るドラえもんだからこそ、このメッセージ。キャッチコピーは、「だいじょうぶ。未来は元気だよ」。

未来を知っているドラえもんがこう言うのだから、未来を諦めるわけにはいかないし、まだまだ「へこたれないぞ！」という気がしていました。

本来、「教育とは死に至らない失敗を安全に経験させるためのもの」であるはずですが。

「転んでも、立ち上がる勇気さえあれば、何回でも転んだらいい！」はです。

「同志社のＤは、DAMEのＤじゃなくて、大丈夫のＤ！」であるはずですが。

だから、「だいじょうぶ。未来は元気だよ」。未来を知っているドラえもんも、未来から現在の私たちに向かってそう語りかけてくれています。

（２）「ドラえもん」：人の幸せを願い、人の不幸を悲しむことができる人

その「ドラえもん」にまつわる「ドラえもん論：ラジカルな『弱さ』の思想」（杉田俊介 株式会社Ｐヴァイン ２０２０年）という本が、この春に出版されました。

竹とんぼを頭に付けば、空を自由に飛べる！ドアを開けたら、どこでも行きたい所に行ける！机の引き出しを開けば、タイムマシンが待機している！

「ドラえもん」は、「科学と空想が混じり合ったような、少し不思議な日常」を描いてくれています。

「ドラえもん」の主な登場人物は、あの人たちです。

「腕白で力のあるジャイアン」「親が金持ちで嫌みな感じを醸し出すスネ夫」「すべてにおいて万能な出木杉くん」「憧れのマドンナしずかちゃん」といった、どこの子どもの集団にもありがちな顔ぶれです。

そして、ドラえもんのパートナーは「弱虫で、なまけものの、のび太」です。

「ありのままの自分でもいいんだ！」という想いと、「このままじゃダメなんだ！」という想いが、絶えず交錯するのび太が、ドラえもんのパートナーです。

「自己肯定と自己嫌悪」の図藤の中で揺れ続ける、弱い存在＝私たちと一緒にです。

テストを受ければ、五回に一回は0点。先生に叱られ、廊下に立たされる。

放課後は、ジャイアンやスネ夫と遊んではいじめられ、家に帰れば「のび太！」とママに叱られてばかりの、のび太です。

そんなのび太のために、ドラえもんは未来の道具を貸してくれるのです。

でも、のび太はその道具を上手く使いこなすことができず、結局失敗の連続です。

「未来の科学技術の夢のような素晴らしい」と、「それらの道具を使いこなせずに失敗する私たち人間の愚かさ」を、垣間見せてくれているような気がします。

それでいて、あまり上手くいかないことの連続の中で、結局のび太はドラえもんの道具を使うことを諦め、なんとか自分の力で乗り越えようとしていくのです。

「学び」とか「教育」って、本来そういうことなのですね。

「自己肯定と自己嫌悪」の図藤の中で、「弱さ」をさらけ出すのび太は、幾多の困難を乗り越え、本当の優しさと思いやりを身につけて、憧れのマドンナしずかちゃんを射止めて、やがて結婚にこぎつけるのです。

マンガ「のび太の結婚前夜」（藤子・F・不二雄 株式会社小学館 2004年 105—106頁）によりますと、「うまくやっていけるかしら・・・」としずかちゃんが不安を漏らします。そりゃあ、そうかも知れません。

しかし、しずかちゃんのパパが、こう囁くのです。

「やれるとも！のび太くんを信じなさい！のび太くんをえらんだ君の判断は正しかったと思うよ。あの青年は、人の幸せを願い、人の不幸を悲しむことができる人だ！それが一番人間にとって、大事なことなんだからね！彼なら間違いなく君を幸せにしてくれると、信じているよ！」って、囁くのです。

「・・・人の幸せを願い、人の不幸を悲しむことができる人だ！それが一番人間にとって、大事なことなんだからね！」口偏に耳が三つのステキな囁きです。

だいたい「学校」は、SCHOOLです。

スコール（SCHOLE）というギリシャ語に由来する言葉です。

スコールって、「遊び・学び・余暇」という三つの異なった意味合いを、たった一言で表すギリシャ語から生まれた言葉じゃないですか！

ただ働く！勤勉だけでは面白くない！人間としての資質を高めていくために「知的な時間」を持つことが最高の幸せである。そう2千年以上前のギリシャの人々は考えていたのです。

「人間は、いかに良く生きるか？いかに豊かに生きるか？」を学ぶ、「幸せになるために学ぶ」そのためにSCHOOLはあるはずですから、ちょっと考えさせられる、しずかちゃんのパパの囁きです。

（3）「きょういく＝教・育・強・競・恐・狂・共・響・協・・・育」とは？

「きょういく」とは、何か？

「教育とは死に至らない失敗を安全に経験させるためのものです」と「折々の言葉」（朝日新聞 2016年2月17日）に出ていて、ドキッとしました。

普通、「教える・育てる」という、漢字を当てはめます。

しかし、「きょう」という漢字には、いろいろな漢字を当てはめることができます。

「競わせる」という意味の「競育」、「強くなる」ための「強育」、画一化して「狂っている」としか思えない「狂育」など、様々な漢字を当てはめることができます。

皆さんはどの漢字を当てはめた「きょういく」を今まで受けてきたのでしょうか？

昨年の夏、北海道にいる長男が帰省してきて、孫とお風呂に入った時に、「おーい。出るぞー」と言うと、長男が言うのです。

「孫だとしてお風呂から出してもらえんだなあ」って。

最初、何を言っているのかわからなかったのですが、かつて自分の子どもと一緒にお風呂に入っていた頃、お風呂からあがるときに、この私がとんでもないことをしていたようです。

一見ほのぼのした、美しい親子の風呂場での光景です。

「おとうさん、もう出たい」などと言うものなら、「そうか、じゃあ九九を言ってからにしようか！」なんて、平気で言っていたのだそうです。

「今日は三の段」と言う子どもは健気に「さんいちが3」「さんにが6」とか、九九を唱えるのです。顔一面、真っ赤になって！汗だくになって！今思えば、残酷でした。

答えられなきゃお風呂から出られない。悪気は全くなかったのですが、まさに力3つの力づくで押しつぶすような育育だったのかもしれない。

「育す」という漢字の「育育」は、「にくづき」に力3つから成り立っていて、しかも上から、ねじ伏せ、押しつぶすような漢字です。

一方、「協力」の「協」という字の「協育」は、十字架のもとに力を3つ合わせると書きます。

同志社はキリスト教主義の学校ですから、やっぱり十字架のもとに力を合わせる、そんな「協育」でなければいけない！と、勝手に考えています。

「子育て」という言葉も、結構、傲慢な言葉です。

相手だけ育てるとか、子どもだけ育つなんて、そんなの傲慢です。

そんなのは教育とは言わないのです。「飼育」「調教」と言うべきかもしれません。

ガソリンスタンドで車にガソリンを入れるように、教室にやってきて、知識というエネルギーをカパーッと頭の中に放り込んで、同じノートを作って、テストになると吐き出してくる、それは「SCHOOL＝学校」とは言わないのです。

「教育工場」と言うべきなのかもしれません。

（4）「人一人は大切なり」

新島襄は、1885年12月18日に同志社創立十周年記念式における式辞で「人一人は大切なり」と語りました（同志社編 『新島襄教育宗教論集』 岩波書店 2010年 112頁）。

新町キャンパスの渡り廊下に掲げられているあの言葉です。

「最良の授業法（1885年2月13日日記）：私がもう一度教えることがあれば、クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払うつもりだ。それができれば、私は教師として成功できると確信する」とも語っています（学校法人同志社「現代語で読む新島襄」編集委員会「現代語で読む新島襄」 丸善株式会社 2000年 179頁）。

力3つで上からねじ伏せ、押しつぶすように育して育てる「育育」から解放されて、キリスト教を徳育の基本とする同志社で「十字架のもとに力3つを合わせる協育」空間、「人一人は大切である」。この言葉を大切に、正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がりが合っているこのマークを掲げる「同志社良心教育」の空気の中で、皆さんは大学生活を送っているのです。

[3] きょうせい

「強制」から「共生」へ！

（1）「狭い門」：マタイによる福音書7章13—14節

「きょうそう」「きょういく」ときて、最後に「きょうせい」です。

今日は、聖書の言葉の一つ、心に刻んでいただきたいと思います。

「狭い門から入りなさい」というマタイによる福音書7章13—14節の言葉です。

皆さんは、「狭い門から入りなさい」という言葉を聞いて、いったい何をイメージするのでしょうか？

就職や受験シーズンになると、新聞や雑誌でこの「狭き門」という言葉が飛び交います。

「狭い門」とは、人々が殺到する「人気の的」のように今日では考えられています。

実際、この春に行われた同志社大学の2020年度一般選抜入学試験は、募集人員が14学部で合計3476人に対し、志願者3万9654人、受験者3万8196人、合格者1万232

3人ですから、実質倍率3・1倍、単純倍率11・41倍の中で、合格され入学されました。

その意味では、新聞や雑誌で言う所の「狭き門」をくぐり抜けてきた一人一人と言えるのかも知れません。

「普通の門、入試の門！」その大きさ、幅はいつも一緒です。

でも多くの受験生が殺到すると「狭き門」と呼ばれ、あまり受験生が多くないと「広き門」と呼ばれるのです。

しかし、この受験で用いられる「狭き門」という言葉は、元々は聖書の言葉ですが、聖書本来の意味を取り違えている典型的な言葉の一つです。

マタイによる福音書7章13—14節

13節「狭い門から入りなさい。

滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。」

14節「しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。

それを見いだす者は少ない。」

では、2000年前に語られたこの「狭い門」＝「命に通じる門」とは、一体どのようなものだったのでしょうか？

イエスが生きていた時代の都市は、敵から街を守るために、周囲を固い頑丈な城壁で囲まれていた「要塞都市」でした。

街をぐるっと囲むように造られた城壁の所々には、「大きくて広い門」と「小さくて狭い門」が、実は別々にありました。

「大きくて広い門」は、「黄金の門」とも呼ばれ、権力者達が戦争に勝って入場する凱旋門のような煌びやかな門でした。

広くて通りやすく、また美しく装飾が施されているため、人々はこぞって、その門から入ろうとしました。これが「広い門」です。

一方「小さくて狭い門」は、ひっそりと片隅にあり、人目につきにくい門でした。

エルサレムの城壁に設けられた門の中で、一番「小さくて狭い門」は、「糞門」「汚物門」と呼ばれ、人やロバがやっと通れるほどの「小さくて狭い門」でした。

この「汚物門」からはエルサレム城内で排泄・排出された糞や生ゴミ、動物の死体などが運び出されたと言われます。

恐らくは、社会からはじき飛ばされていた人々や、人目を避けて生活せざるを得なかった人々が利用し、もっぱら出入りする門、それが「狭い門」です。

入試のように、一つの門が、殺到する人数によって、広くなったり、狭くなったりするのではないのです。

確かにイエスは、「狭い門から入りなさい」と、語りました。

でもそれは、人気があって人々が殺到するために「狭く感じられてしまう門」ではなくて、「汚れというレッテルを貼られた人々が腰を屈め、小さくなってくぐり抜ける門」、その門を指さして「狭い門から入りなさい。（中略）命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか」と語ったのです。

「細くて、小さくて、狭い門」からしか入ることを許されなかった人々と共に生きる、そんな「共生への志」に満ちあふれた言葉でした。

(2) オリンピック

2020年東京オリンピック・パラリンピックは、今のところ延期です。

「お・も・て・な・し」どころか、「や・り・な・お・し」という感じです。

その歴史を紐解きますと、BC776年に第一回古代オリンピックが開催され、AD393年の第293回オリンピックで終了します。

392年にローマ帝国でキリスト教が国教化されたことに伴って、「ゼウスの神の祀る祭典」をやめよう！ということになり、古代オリンピックは幕を閉じたのです。

近代オリンピックはフランスのクーベルタンによって、1896年（第一回）再開されます。2020年に行われるはずだった東京は第32回オリンピック。

まだ古代オリンピックの十分の一ほどの歴史しかないんですね！

その近代オリンピックのモットーは、「より速く、より高く、より強く」です。

アスリートたちが全力を尽くして活躍するのは素敵なことですが、なぜか私たちは「国別のメダル獲得数」の方に一喜一憂してしまいます。それは、なぜなのでしょう。

私たちも、「速さ、高さ、強さ」を追い求め、「あいてのこぼしを、ひらいてください」と言われても、開くことができない競争意識に、どっぷりと浸かっているからなのでしょう。

でも、私が同志社大学の学生だった時にトイレ掘りのワークキャンプで訪ねたネパールで出会った生活は、逆でした。

特に牛の出産場面は、私にとって衝撃でした。

産まれてすぐ、母牛は羊膜、羊水でベタベタの子どもを、舐め回していましたが、一時間もすれば、子牛はヨタヨタしながらも、自分の足で歩き始めたのです。

でも私たち人間は、歩くのに一年、一人前になるのに20年はかかります。

もし、「速いということが優れているとするならば、人間ほど下等な動物は他にはいないなあ！」そう確信した瞬間でした。

「同志社とは底辺へと向かう志で結ばれた群像である」と評され、正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がりが合っているこの同志社マークは、「遅く、低く、弱い」という、弱さと脆さを抱えた人間が、ありのままに「弱さ」を認め合いつつ共に生きていく。「共生への志」の大切さを追い求める学校であることを、象徴しているかのようです。

(3) 「良心を手腕に運用する」

新島襄は、生徒への書簡や同志社大学設立の旨意の中で、「良心を手腕に運用する人物」「良心の全身に充滿したる丈夫（の起こり来たらん事を望んでやまざるなり。）」と語ったのです。（学校法人同志社「現代語で読む新島襄」編集委員会 「現代語で読む新島襄」 2000年 216頁）

同志社大学の正門のところにある「良心碑」に刻まれている言葉です。

「良心」をもつことは大切です。「同志社良心教育」と言われるくらいです。

でも、ただもっているだけでは、十分ではありません。

良心をもっているだけではなく、「良く用いる」＝手腕に運用する＝全身に充滿させる人物＝「生き方がハンサムな同志社人」＝それこそ「えらい人になるよりも、良い人間になりたいな」と謳われる所以です。

「強いる強制」ではなくて、「狭い門から入らざるを得ない人々」と共に生きる「共生」空間、「良心の全身に充滿したる丈夫の起こり来たらん事を望んでやまざるなり」＝この言葉を大切に、正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がりが合っているこのマークを掲げる「同志社良心教育」の空気の中で、皆さんは大学生活を送っているのです。

【4】おわりに

〔1〕きょうそう：「競争」から「共創」へ！

●「『競い争う』関係」から、「『共に創り出していく』関係」へ！

〔2〕きょういく：「養育」から「協育」へ！

●「『脅して育てる』ニクヅキを上から力3つで押さえ込む関係」から、

「（遅さ・低さ・弱さの）十字架のもとに力3つを合わせる関係」へ！

〔3〕きょうせい：「強制」から「共生」へ！

●「『強制』という強いる関係」から、「違いを認め合いつつ『共に生きる』関係」へ！

そして、「▲＝さかさまの同志社マーク」から「▼＝同志社マーク」へ！

「だいじょうぶ。未来は元気だよ」と、私たちに語りかけてくれたドラえもんですが、私たちにとって「未来」は、社会科の教科書の最後のページにある、歴史年表の右の端っこにあるイメージがあります。

でもね。「未来」は、目の前にいる皆さん一人一人が「未来」なのです。

「未来」は、歴史年表の右の端っこにあるのではなくて、この同志社のキャンパスの只中にあるのです。

「STAY HOME」「SOCIAL DISTANCE」「GO TO TRAVEL」「三密」「自粛警察」「夜の街関連」といった言葉を産みだした新型コロナウイルスの感染拡大。感染者への誹謗中傷など、人々を不安と絶望に追い込む状況が深まる中、「学校は何のためにあるのか?」「そもそも学校は何をする場所なのか?」を、深く問い返された半年余りでした。そんな状況の中、やはり教育現場くらは「未来・希望」に満ちあふれる空間であることを失ってはならないと思います。

知識や技術を教え込むことはできます。しかし、生命（いのち）やこころ、同志社が掲げる良心は、教え込むことはできません。むしろ、「自ら学び取り、感じ取るもの」であるはずでず。「人は造られるのではなくて、育つもの」です。

その意味では、人がそこにいれば勝手に育つ、そのような場所・空間をどう用意しておくかが、大人や教育者の使命なのでしょう。

三角形が上へ！上へ！と競い合う上昇志向渦巻く競争社会の中で、私たち「志を同じくする者が集まって創る結社」＝「同志社」の徽章が、正三角形が三つ、下へ！下へ！と向かい、そして一つに繋がり合っている。

少々勝ちな、この同志社マークの解釈ですけれども、その意味合いを人生の土台に据えながら、「人の幸せを願い、人の不幸を悲しむことができる人」「えらいひとになるよりも、良い人間になりたいな」（谷川俊太郎作詞 大中恩作曲 同志社小学校校歌）と口ずさみながら、「狭いけれど命（いのち）に通じる門」を追い求めて生きていていただきたいと、切に願っています。

もう、あいてのこぶし、ひらけますよね？

2020年10月27日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
オンラインによる「講演」記録